

「地位が向上した」(p. 225-226)と考えていた。ただし著者は、このような選択的な自由の享受は、農村女性が商業主義文化やグローバルな資本主義システムに対して周縁的な地位に組み込まれるプロセスでもあったと結論付けている。

経済的な条件が異なるので他地域との無条件な比較はできないが、本書からは、既存研究が労働にともなう東南アジア女性の多面的な実践を、「搾取」される対象として一元化してきたのではないか、という問題が改めて見えてくる。既存研究は、特定の活動や行為が「生産労働か家事労働か」というおそらく当事者レベルには存在しない問いを立てることで、どこの地域でも家内領域が市場化された労働空間から完全に切り離されているかのように扱ってきた。そして、両方を対立した概念として提示することで、論理上、女性労働は必ず二重性を帯び、労働市場において周縁化されるという構造的問題に自ら陥ってきた〔中谷 2003: 156〕。

北タイ農村の状況は、生活基盤を奪われ、低賃金で過酷な労働を強いられる地域と比べると特殊な環境かもしれない。農村地帯に位置する工業団地が常に労働力不足の状態で、「社会経済的条件によって命令に従う必然性が乏しい」(p. 217)という地域的特性から、女性たちは生存基盤を確保したうえで求職や転職には困らない。その意味では、先進国企業による東南アジア女性への無情な搾取を明らかにしてきた従来のフェミニスト的研究と本書を安易に比較することは躊躇される。しかし、環境の違いを十分踏まえたうえで比較するならば、本書は女性労働者の生活世界が工場でのみ完結しているのではなく、余暇や家庭生活と連続した時間のなかにあるという単純な事実と真摯に向き合い、仕事・労働をめぐる多面的な問題を地域特有の概念によって浮き彫りにしたと言えよう。

最後に、評者の問題関心から本書の課題をあえて挙げれば、本書の主題である労働を通じた女性の近代化経験が、北タイ農村社会全体におけるジェンダーの問題とどのような関係にあるのか、という疑問が残る。もちろん本書の主旨がそこにはないのは重々承知だが、女性工場労働者の近代化経験が及ぼす文化変容、特に家庭生活への影響を

明らかにするのであれば、現代北タイ女性の労働のあり方と農村社会における様々なジェンダー規範(たとえば祖霊信仰や儀礼に見られる母系のイデオロギー、財産分与や相続、親の扶養における女性の優先)がいかに関わっているのかという議論を本書で積極的に論じる必要があったのではないだろうか。著者も第4章と第5章でタン・サマイな行為と関わる範囲で個別に若干の考察をしているが、労働に関するオルタナティブな視座とは対照的に、ジェンダーに関しては伝統的な価値観とタン・サマイな価値観のどちらかに振り分けられたままである。グローバルな資本主義システムに接合していく過程で、北タイ農村社会での労働は、どのように女性(あるいは男性)の役割としてジェンダー化され、権力性を帯びて階層化していくのか。また、そもそも労働の場と家庭生活の場はいかに区別されているのか、特に著者の議論から垣間見える労働をも含み込んだ家内領域は、その外部といかに区別されているのか、という点こそが仕事・労働を通じた東南アジア女性の近代化経験から導き出されるオルタナティブな価値観であるとも考えることもできるのではないだろうか。

(木曾恵子・京都大学東南アジア研究所)

参考文献

中谷文美. 2003. 『「女の仕事」のエスノグラフィ——バリ島の布・儀礼・ジェンダー』京都：世界思想社。

新谷忠彦；クリスチャン・ダニエルス；園江 満(編)『(アジア文化叢書) タイ文化圏の中のラオス——物質文化・言語・民族』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所歴史・民俗叢書Ⅶ. 東京：慶友社, 2009, 401p.

国民国家を単位とした歴史叙述への批判が高まって久しい。かつて古田元夫は、歴史研究が対象とする「地域」とは固定的なものではなく、歴史家が課題意識に応じて設定する可変的なものであるとする「方法としての地域」という見方を提

示した [古田 1998]。本書もまた、複合文化交流圏としての「タイ文化圏」を設定することで国民国家「ラオス」を単位とした歴史研究を相対化し、従来「辺境」として扱われてきたラオス北部地域の国境を越えた文化交流の歴史の実像に迫ろうという、意欲的かつ野心的な試みとなっている。

「タイ文化圏」は、地理的には中国西南部からインドのアッサム地方にかけて四角形に広がる広大なタイ系民族の居住区域を指す。本書はその一部を成すラオス北部地域に焦点を当てたものである。ラオスでは 1975 年まで国内を二分しての内戦が続き、革命後もラオス人民革命党の厳しい統制のもと、外国人研究者がフィールド調査を行うのが困難な状況にあった。近年、フィールド調査に対する規制は緩和されたが、インフラの未整備などの理由により今なお国内での調査は容易ではない。本書はこのような状況のなか、各著者がラオス北部地域において実施してきた調査の結果に基づき、執筆されたものである。

本書に先立つこと 11 年、本書の編者の 1 人である新谷が編者となり『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』が出版されている [新谷 1998]。『黄金の四角地帯』におさめられたのは言語学と歴史学を専門とする著者たちの論稿であったが、その続編といえる本書ではさらに民族考古学、農学、文化人類学など多分野の研究者が加わり、本書の性格をより学際的なものとしている。「シャン文化圏」から「タイ文化圏」への名称変更については、第 9 章で新谷が「シャン文化圏」ではビルマのシャン州が中心の文化圏との誤解を受けかねないとの懸念があった、とその理由を説明している (p. 383)。

タイ系民族の共通性については 19 世紀末にチェンマイを中心にラオス、中国南部などで布教活動を実施した、アメリカ人宣教師ウィリアム・クリフトン・ドッド (William Clifton Dodd) が *The Tai Race* を著すなど、古くから関心をもたれてきた。本書の新しさは、この地域をとおしてみられる共通性をタイ系民族に限定されたものとせず、非タイ系民族をもふくめた複合文化交流圏としての「タイ文化圏」を提唱したことにある。いずれも綿密なフィールド調査にもとづいた本書の論稿

は、すべてが非常に高い資料的価値を有する世界的にみても貴重な研究といえることができる。

本書は、以下の 9 章から構成されている。

- 第 1 章 地域としてのラオス北部 (園江 満・中松万由美)
- 第 2 章 雲南人 (ホー) のボンサーリー史——山地民を統治した傅一族の事例を通して (クリスチャン・ダニエルス)
- 第 3 章 言語と民族 (新谷忠彦・加藤高志)
- 第 4 章 ラオス北部におけるタイ・ルー——サイニャブプリー県における移住史と守護霊儀式を中心に (馬場雄司)
- 第 5 章 ラオス北部におけるタイ・ヤンとクムの関係——生産システムの観点から (富田晋介)
- 第 6 章 農具と農耕技術が描く「タイ文化圏」 (園江 満)
- 第 7 章 鉄器文化の交わる場所——鍛冶技術からみるラオス北部 (神野 信)
- 第 8 章 水牛の利用と互酬性——ラオス北部タイ系農村の事例を中心に (高井康弘)
- 第 9 章 タイ文化圏研究の今後 (新谷忠彦)

第 1 章では、ラオス全土を地勢、気候、人口・民族分布、稲作の側面から検討し、タイ文化圏に属するラオス北部が中・南部とは異なる文化的基層を有することが示唆される。第 2 章では、ボンサーリー県に居住する雲南人の事例をとおして、ラオス近現代史とタイ文化圏における山地民の歴史的役割が検討される。ラオス内戦史研究ではバテート・ラオ勢力における山地民族の活躍が指摘されてきたが、実証的な研究はほとんどなされていないのが現状であった。本章では、中立派のカムアン・ブッパー大佐が中国・ベトナムとの連携を深めつつボンサーリーで社会主義政策を進める過程に、山地民が取り込まれていく様子が描き出される。第 3 章では、著者らが 1996～99 年にかけてボンサーリー県を中心に実施した言語調査の結果得られた科学的データに基づき、ラオス北部の言語状況が示される。このなかには、著者らにより初めて言語学的記述が行われた言語が多数含ま

れ、危機言語の存在も指摘されている。第4章では、著者のフィールド調査をとおして明らかとなったラオス北部、サイニャブーリー県を中心とするタイ・ルーの移住史と守護霊儀礼の実態と歴史の変遷が詳細に描かれる。第5章では従来、「水田-水源涵養林システム」と「焼畑-休閑林システム」という2つの生産システムの担い手（前者がタイ系民族、後者が主としてモン・クメール系の山地民）の間には支配・被支配関係があるとされてきたのに対し、民族間に明確な階層関係のない事例が示される。著者は2つの生産システムにおけるコメの生産量に注目し、後者の生産環境においても余剰米が生産され、コメを外部依存する必要がなかったことから山地民が自立性を維持することができたと結論付けている。第6章では、犁を中心とする耕具に焦点を当て、農具と水田耕作技術からラオス北部の稲作の様子を概観し、この地域における多民族間の文化的・技術的交流が検討される。そしてラオス北部では、水田稲作民とされてきたタイ系民族の間でも水田稲作が陸稲栽培の技術的な基盤の上に、生産量の安定を図る手段として成立したとの推測が示される。第7章では、ラオス北部における鍛冶技術の現状から、この地域の鉄器生産や技術の接触・需要の在り方とその背景について考察がなされる。第8章では、水稲作、焼畑耕作との相互連関の中での水牛の利用や水牛に関係する儀礼に焦点をあてることで、ラオス北部における人と水牛の関わりが多面的に検討される。第9章では編者の一人である新谷によって、「タイ文化圏」研究のこれまでの足跡が総括され、今後の研究課題として言語調査の継続やタイ系言語による文献の収集、整理、解説などとともに、大河川流域文化圏を念頭においた調査の必要性が指摘される。

このほか、各章の間にはモン族の食習慣（安井清子）やフアパン県での歴史調査（増原善之）など各論稿に関連する6つのコラムが挿入されている。そして本書をとおして「タイ系言語をリングフランカとしながらも、多言語、多民族であって一つの伝統に支配されるのではなく、さまざまな文化的要素を持ちながら、それらを有機的に結びつけている何らかのゆるやかなシステム」（p.1）

が存在する複合文化交流圏としての「タイ文化圏」の姿が描きだされるのである。

以上のような内容を持つ本書が素晴らしい研究書であることは疑いの余地がない。それは第一に、すべての論稿が地道なフィールド調査と科学的なデータに裏付けられた高い資料的価値を持つものであるということにある。また、国境地域をタイ文化圏の越境的な関連性からとらえ直そうという問題意識が全著者に共有され、論文集としての完成度も高いものとなっている。本書は「複合文化交流圏としてのタイ文化圏」という枠組みの正当性を、説得力をもって読者に提示することにほぼ成功しているといえるだろう。

しかし一方で、全く不満が残らなかったわけではない。ひとつは、国家との関係についてである。新谷によると、著者らがもっとも重視したのは「物事全てを先入観や偏見を持たずに率直に観察する」ことであるという（p.384）。とりわけ、国境という先入観を取り払うことが強調されている。しかし、このことを意識するあまり、国家の影響力を過小評価しているような印象を受ける箇所が見受けられる。第9章で新谷は「こうした文化圏の中に国境線を設けて、人、物、カネの移動を合法的に行おうとする国家権力の意図とは裏腹に、伝統的なバイパスルートを使った非合法的な移動がなくなる気配はまったくなく、国境線とは関係のない民族間の有機的な関係は今尚健在である」と述べている（p.385）。たしかに、本書をとおして現在も続く越境的な民族間交流の事例が多数示されている。しかし国境地域は国防上重要な地域であり、国家権力の介入と無関係であり続けることは難しい。とくに、現在ラオス政府は市場経済化を進める一方で、「貧困削減」の名のもとに農村・山岳地域に対する管理強化を図っており、今後国境を越えた移動に国家権力の統制が強まる可能性は否定できない。本書においても第4章で馬場が、1990年代にサイニャブーリー県で守護霊儀礼が禁止された背景に、国境を越えて親族が集まる儀礼に対する、政府の懸念を指摘している。こうした事実を鑑みれば、今後国家の介入によりこの地域の越境的交流に何らかの変化が生まれることは

不可避といえ、上記の新谷の言葉は少々楽観的にすぎるように思われる。

もうひとつは、本書の先駆性を思えば過ぎた要求になるのかもしれないが「タイ文化圏」の中の諸民族の関係についてである。本書の新しさが非タイ系民族をも含めた越境的な複合文化交流圏である「タイ文化圏」を設定した点にあることは先に述べた。たしかに鍛冶技術や農具・農法の分布などについての詳細な記述から「タイ文化圏」の諸民族間になんらかの交流関係が存在することが浮き彫りとなる。しかしながら、そうした交流の背後にどのような歴史的関係性を読み取ることができるのか、必ずしも十分な分析がなされていないように思われた。たとえば新谷は第9章で「社会的な側面から見れば、タイ系民族は非タイ系『民族』を自らの社会の中に組み込んで、それぞれに何らかの社会的な役割を持たせていることが見て取れる」(p.385)としているが、非タイ系民族の視点から見た場合はどうであるのか。彼らがタイ系民族から何を取り入れ、何を取り入れなかったのか、さまざまな技術交流の背後にある、この地域の諸民族間の階層関係や政治的動態が学際的に明らかにされていくことを期待したい。そうすることで、マーティン・スチュアート・フォックス(Martin Stuart-Fox)ら、ラオス研究者によって繰り返されてきたタイ系・非タイ系民族間に支配・被支配関係があるとする「定説」に何らかの見直しを迫る可能性があるのみならず(本書第5章で富田が試みている)[Stuart-Fox 1998]、山地民研究にも新たな視点を提供できるものと考えられる。

最後に、本書をとおして非常に残念であったのが、誤字・脱字、表・節番号の誤りなど、校正の

不徹底に起因する誤植が散見されたことである。貴重なデータが網羅された良書であるだけに、この点が大変におしまれる。

以上、いくつかの問題点を指摘したが、それでもなお本書が高い学術的価値を有する良書であることには変わりない。星野龍夫は1990年に出版された著書のなかで、タイ諸族の言語文化研究について「我々の言語データでは特にめぼしいものと言え、ベトナム、ラオスの戦争難民の集落や個人からしか得られなかった。すべてのエリアを現代言語学の手法で現地記述することなど、everybody's dreamであったし、いまだにそうである」と述べている[星野 1990: 57]。本書の研究はかつてのeverybody's dreamがもはや夢ではないことを明確に示すものとなった。著者らの今後の研究の発展を期待してやまない。

(矢野順子・東京外国語大学・上智大学)

参考文献

- 新谷忠彦(編). 1998. 『(アジア文化叢書) 黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所歴史・民俗叢書Ⅱ. 東京: 慶友社.
- 古田元夫. 1998. 「地域区分論——つくられる地域, こわされる地域」『岩波講座世界歴史1 世界史へのアプローチ』樺山紘一; 川北 稔; 岸本美緒他(編). 東京: 岩波書店.
- 星野龍夫. 1990. 『濁流と満月——タイ民族史への招待』東京: 弘文堂.
- Stuart-Fox, Martin. 1998. *The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline*. Bangkok: White Lotus.